学界消息

史学研究会関係

史学研究会五月例会
インドの旅
—インド仏教史跡調査国帰朝報告—
（スライド使用）　樋口　隆康氏
梶山　雄一氏

同六月例会
臨地講演　賀茂別雷神社—正傳寺—常徳寺
—常照寺—光悦寺—造迎院
講師　柴田　実氏
藤井　学氏

国史関係

読史会新専攻生歓迎会
五月一五日（金）午後三時　於河原町二条志津屋
本年度新専攻生六名を迎え、教官・先輩・学生ら四〇名出席のもとに開催された。

読史会春季大会
六月二十八日（日）午前九時半より
京都大学法経第五教室
佐賀藩「均田制度」の実態と意義　芝原　拓自
エミール・プレトーリウスの日本美術蒐集について　中村　二柄
古代美術史の時代区分　小川　光暘
天台回峰行の源流と葛川の開発　村山　修一
堺信証院について　横田　光昭
大和国における免田型庄園の性格
—大和国高殿庄を中心として—　平岡　定海
太平記論批判　井上　良信
中世末期の村共同体と領主権　井ケ田良治
和光同塵
—中世神道の基本観念—　柴田　実

東洋史関係

故安部健夫教授を偲ぶ会
去る二月二十日急逝された京都大学人文科学研究所教授安部健夫博士を偲ぶ会が、百日忌にあたる五月三十一日（日）午後三時より、同研究所講堂に於いて、東洋史談話会の主催で催された。会には、宮崎教授はじめ、教官、学生四〇名が参集し、故博士の在りし日の御学業・御人柄を偲び意義ある日曜日の午後であつた。

旧制大学院例会
四月例会　四月十八日（土）午後二時　陳列館会議室
唐の律令編纂と法院　中谷　英雄
五月例会　五月九日（土）午後二時　陳列館会議室
郷挙里選について　杉村　壮三
諸葛亮の南中遠征について　狩野　直禎
六月例会　六月二十七日（土）午後二時　陳列館会議室
椿朋銀について　谷　光隆
北魏の霊太后　兼子　秀利

西洋史関係

日本西洋史学会第十回大会　五月十六日・十七日　京都大学法経第五・七教室
日本西洋史学会は第一回大会を昭和二十五年に京都大学で開催したが、本年度の大会は約四百名の参加者を迎え、十年ぶりで京都大学でおこなわれた。大会の形式としては、シンポジュームの形式をとらず、各時

代、各分野の研究者にバラエティに富んだ発表の機会を提供することにし、古代、中世、近代、現代の各時代にわたり、政治史、経済史、思想史の各テーマについて、三二名の研究発表がおこなわれた。なお十七日・午後五時からは、京大楽友会館において、平沢総長、田村文学部長を来賓に迎えて、懇親会が盛会裡にひらかれた。なお、発表題目は次の通りである。

古代科学における二、三の問題　平田　寛
クセノフォンの「ヘレニカ」　衣笠　茂
エウエルゲテース　井上　一
ローマ共和末期の私兵と属州の nominatim evocati　吉村　忠典
ローマ鉱山業における奴隷制と coloni 制——Lex Metalli Vipascensis の場合——　馬場　典明
十一世紀における教会改革　原田　栄一
コムーネ期におけるイタリア村落の変革過程——低南部四州を中心に——　村本　竹司
中世ドイツにおける村落支配権　中村賢二郎
独立革命時のニューヨーク植民地における "merchant" の範疇について　仲田　光
南北戦争前夜の南部分離運動について——ニュー・ディールと第二次世界大戦　尾上　一雄
ロシアにおける資本主義の発達と外国資本　増田　冨寿
ビスマルクの農業政策とドイツ農業　太谷　勤
ビスマルクの社会政策思想について　林　健太郎
ツァーベルン事件をめぐる第二帝政の官僚と軍部　村瀬　興雄
ローザ・ルクセンブルクとドイツの政治　西川　正雄
清教徒と十六世紀イギリス政治史　植村　雅彦
清教徒革命左翼の宗教的背景　松浦　高嶺
イギリス革命におけるヒュウマニズムとピューリタニズム　浜林　正夫
Fiscal Feudalism の崩壊とイギリス革命　隅田　哲司
フランス農民革命の条件　柴田三千雄
一七六〇年代のイギリス議会とその社会的背景　岩間　正光
製釘工業における前貸問屋制度　天川潤次郎
労働組合生成期の構造——産業革命前夜の繊維工業における——　市川承八郎
ペトラルカのベネフィキウムについて　渡辺　友市
中世末期のフランスの国家意識について——ピュール・デュ・ボワの思想——　橋口　倫介
Via Antiqua と Via Modena —Wittenberg 大学における Biblcal Humanism の勝利—　相沢　源七
J. S. Mill における Majority の問題　若松　繁信
ホイジンガの歴史観　里見元一郎
ダールマン「政治論」の史的分析をめぐって——ドイツ初期自由主義研究の為に——　千代田　寛
歴史事実の一回限り性について　神山　四郎
Beard の外交史観——Devil Theory を中心として——　中屋　健一

地理学関係

人文地理学会第31回例会
四月一八日（土）午後二時　於　奈良女子大学
奈良盆地の村落類型　樽松　静江
奈良盆地周辺に於ける集落　堀井甚一郎
TVA視察談　帷子　二郎

人文地理学会第32回例会

五月二三日（土）午後二時　於京都大学

ネパールの集落（幻燈使用）　高山　龍三

フランスの農村を巡りて（幻燈使用）　谷岡　武雄

地理学談話会新任教官・新専攻生歓迎会

五月三日（日）午後三時於河原町四条〝ミュンヘン〟

本年度より助教授として着任された水津一朗氏及び新専攻生六名、聴講生一名の歓迎会を行つた。参会者は教官、先輩、学生五二名。併せて、七月上旬、イラン、アフガニスタン方面の学術調査に赴かれる織田教授・末尾助手の壮途を祝した。

フンボルト・リッター没後百年祭

近代地理学の創始者アレキサンダー・フォン・フンボルトとカール・リッターが没してから、今年は百年に当るので、日本地理学会・東京地学協会の共催により、四月二四日（金）東京上野国立博物館に於て、左記の記念講演が行われた。

フンボルトとその時代　西川　治

カール・リッターと近代地理学　野間　三郎

カール・リッターの人間性　長田　新

フンボルトの南米旅行　辻村　太郎

日本地理学会春季大会

四月二五（土）・二六（日）両日、立教大学において開催された。人文地理学関係の発表題目は左記の通りである。

わが先史歴史時代の地形面と地形変化に関する二、三の野外資料について　神尾　明正

本州島西端地方の先史地形（第一報）

小野忠熙・浜田清吉・三輪正房・三浦堅

景観変遷の速度とその要因

―条里遺構からみた―　山田　安彦

近世濃尾平野南部干拓新田地域に於ける人口増殖力　坪内　庄次

江戸時代末期における困窮宿駅の一形態

本街道宿場町の増設

―東海道戸塚宿の場合―　浅香　幸雄

近世銚子の漁民と農民の関係（高神村外川の場合）　渡辺　謙

明治初年における漁場入会の実態

―明治一九年兵庫県の瀬戸内海沿岸部における―　河野　通博

遠洋漁港焼津の形成に関する一考察　古川　史郎

三陸常磐地域の資本制漁業と漁港　田中　豊治

岩手におけるたばこ栽培地の分化とその形成　阿部　和夫

果樹栽培の地域的専門化と多角化　長谷川典夫

桑園と果樹園との競合関係について　安藤万寿男

本邦における養蚕業の生産力の地域的発展　新井　寿郎

軽井沢高原の農業経営について　市川　健夫

東濃窯業地帯の農業経営　野原　敏雄

大阪府泉南地方の灌漑水利について　堀内　義隆

広瀬川流域の秋落田現象　須藤　万治

台風二二号（一九五八年）から見た東京西郊の水害（都市水害第三報）　菊地　光秋

伊豆半島およびその周辺地域における台風二二号に伴う雨量分布　河村　武

狩野川流域における山崩れ　市瀬　自由

台風二二号（狩野川台風）による狩野川流域における山地崩壊と水害　市川　正巳

狩野川流域における洪水堆積土の研究　荒巻孚・高山茂美・原昭宏

狩野川の河床変動に関する予察的研究　三井嘉都夫

狩野川水害における農家被害の構造

水害と農民　石井　素介
—台風二二号伊豆水害の実態—赤峰　倫介
二二号台風（一九五八年）による狩野川流域の水害
—特に集落の被害について—　栗林　沢一
九州島北部の野生大形唆乳類の分布とその意義　千葉　徳爾
カロリー計算による大隅半島の土地生産力　浅井　辰郎
経済的土地分類
—コーネル・システム—　上野　福男
PICA（Chile）の地下水灌漑について
—乾燥地における水の地理学的諸問題（第二報）—　小堀　巖
一チベット人村の調査　高山　龍三
イギリスにおけるローマン・タウンの現状と地理的問題　藤岡謙二郎
Die Zwischenstaaten —第四報—　今村　学部
地形別人口密度図について　川井　玲子
本邦水田集団分布地域における農業人口の増減（第三報）　小林　寛義
低湿地の土地改良と農村構造
—児島湾干拓地の場合—　南　智
伊豆諸島特に大島および八丈島における製炭時期について　福宿　光一
多摩川水源山林の変質過程
—山梨県小菅村の場合（第八報）—　松村　安一
御岳周辺山地における林業の地域的展開
—加子母の育林について—　上島　正徳
乗鞍岳東麓における大野川の土地利用　松原　義継
三本木原土地利用の変遷　内田　実
常磐炭田における炭鉱労働力の特質　丸井　博
富山平野における工業と農業の関連
—地元資本による紡織工場の経営を中心として—　北林吉弘・加納裕哉・新藤正夫・竹内伸一・須山盛彰
製造糸の種類からみたガラ紡業地域
—技術の伝統性の分析—　松井　貞雄
鳥取県における未解放部落の地理的研究　岩永実・宇田川宏
能登半島宇出津港における物資流通圏の消長　矢ケ崎孝雄
電話通信発生からみた北海道地方の地域区分　稲永　幸男
小売商店と通勤人口との分布
—濃尾平野の場合—　水野　元
産業別人口からみた都市化（埼玉県の場合）　島田　侑男
東京西郊における住宅の進展と都市化　山鹿　誠次
戦災前後における城下町都市の変貌過程
—姫路市の場合—　稲見　悦治
都市の中心地的機能に関する研究　石水　照雄
都市の性格と金融活動　板倉勝高・柾幸雄・竹内長生
都市力の表現に関する一試論　森脇　良二

考古学関係

考古学談話会　四月一八日　午後一時三〇分
陳列館第二教室
本年度新入生（三回生三、研修員一）の歓迎会と本年四月から天理大学おやさと研究所に講師として就職された金関恕氏の祝賀会をかねて、本年度の第一回例会を開いた。インド仏教史跡の調査旅行を終えて、三月末に帰国された長広敏雄教授と樋口隆康助教授の、調査状況、史跡の現状などについて講演があつた。
日本考古学協会第二三回総会　明治大学
シンポジウム　五月四日
無土器文化の諸問題
1　地域性について
2　縄文時代への連関

司会　杉原荘介。

報告者　大場利夫、藤沢宗平、芹沢長介。

研究発表　五月四―五日

ローム層内に発見された石斧を伴う文化について　藤沢宗平・林茂樹

沖積地質学的編年の現段階　神尾　明正

諏訪湖畔根の石器について　藤森　栄一

大浦山遺跡とその土器　赤星直忠・岡本勇

桐生市橋詰遺跡の調査　周東隆一

会津盆地常世遺跡の発掘について　桑山　龍進

屋久島一湊における先史遺跡の調査　国分直一・盛園尚孝・重久十郎

愛知県北設楽郡津具村鞍舟遺跡の調査　久永　春男

磐田市西貝塚調査概報　麻生俊・市原寿文

秋田県能代市柏子所貝塚の墓葬について　大和久震平

山ノ口遺跡　河口　貞徳

巴形銅器と直孤文と双脚輪状文の起源　宇佐　晋一

当麻寺本堂下の古墳について　小島俊次・岡田英夫

窯槨を主体施設とする火葬古墳の新例　森　浩一

武蔵国分寺址発掘調査報告　矢島　恭介

京都国際文化観光会館敷地遺跡の調査　杉山信三・安井良三・岡田茂弘

武蔵八王子城址の調査　奥田　直栄

公開講演　五月五日

古典考古学の旅　村田数之亮

アンデスを訪ねて　石田英一郎

京都府与謝郡加悦町温江（かやあつえ）　丸山古墳の調査

三月二三―二五日。昨年末、仿製の方格規矩四神鏡が発見されたので、京都府教育委員会の委嘱によつて、京都大学考古学教室横山浩一助手が調査した。竪穴式石室を築いて粗製の組合式石棺をおさめた、丘陵上の円墳である。盗掘されていて遺物は鏡だけであつた。

長岡京址の調査

四月一六日―七月。京阪神急行電鉄株式会社土地経営部が西向日町駅の北に住宅建設の計画をたて、その工事中に建築址らしい遺構が認められた。そのため調査を長岡京址調査研究会（会長　梅原末治博士）に委嘱。研究会では樋口隆康助教授を発掘担当者として、京都大学考古学教室学生、建築学教室員、同学生および同志社大学大学院学生安井良三氏ほか同大学生数名の協力をえて、約一万平方メートルの範囲を調査した。遺構が出土する層が浅いために、そうとう破壊されていて、遺構の検出は困難を極めたが、現在まで六箇所に建物址を確認している。建物の配置は藤原京、平城京、平安京についておこなわれている復原とかなり違つているようで、各建物の機能については検討中である。

下関市綾羅木町　若宮古墳の第二次調査

五月二三日―六月一一日。下関市教育委員会の委嘱により、天理大学おやさと研究所金関恕講師が、昨年九月の第一次につぐ継続調査として、本年度は主体部を発掘した。京都大学考古学教室からも二名参加。この古墳は台地の一端にある前方後円墳で、長さ四一・四メートル、後円径二一メートル。後円部のほぼ中央に、まわりを粘土づめにした大形の箱式石棺をすえ、さらに粘土を覆つて封土を盛りあげている。そのご括れ部から横にほりすすめ、箱式石棺の一端をとりはずして追葬をおこなつた形跡が認められた。盗掘されていたが、人骨が二体以上、硬玉勾玉、碧玉管玉、鉄刀、

鉄剣、鉄斧が発見された。

「史林」バックナンバーのお知らせ

次の各号に限りバックナンバー若干在庫いたします。御希望の向は定価に送料（定価一〇〇円まで八円・一〇〇円以上一六円）を副えてお申込下さい。（　）内は定価

三三巻　一・二・五号（各冊八〇円）
三四巻　一・二合併号（一四〇円）・四号（八〇円）
三六巻　一・二号（各一〇〇円）
三八巻　二・三・四・五（各一〇〇円）・六号（二〇〇円）
三九巻　三・四・五（各一〇〇円）・六号（二〇〇円）
四〇巻　一・五（各一〇〇円）・六号（二〇〇円）
四一巻　一・二・三・四・五（各一〇〇円）六号（二〇〇円）
四二巻　一・二・三号（各一八〇円）
史林総目録（一～四〇巻）（二〇〇円）
隔蓂記　第一　定価二千円　送料八〇円

史学研究会
振替京都五一五五番

執筆者紹介

梅原　末治	京都大学名誉教授
藤岡謙二郎	京都大学教授
藤縄　謙三	大阪府立大学助手
日野開三郎	九州大学教授
狩野　直禎	京都大学大学院学生
阿部　猛	北海道学芸大学助教授
岡田芳三郎	平安女子短期大学教授
三上　次男	東京大学教授
吉田　晶	京都大学大学院学生
原田　伴彦	大阪市立大学助教授

編輯後記

今号がお手許に届く頃は、暑さも一段と酷しくなることと思います。

今号も前号に増して力篇雄論を掲載することが出来ました。名誉会員梅原先生の御寄稿と、理事藤岡先生の御帰朝第一作とをいただき、嶺上花を添えることが出来ました。特に梅原先生には、御退官の時に御約束いただいていたものです。また先生の御寄稿を機会に、三四巻四号以来種々な理由から中断していた口絵図版を復活いたしました。一読、しばし巷中の酷暑を忘れることが出来るものと、編集者一同、ひそかに自負して居る次第でございます。次号にも、会員の皆様の力作のよせられますことを期待いたして居ります。

（横山裕男）

訂正　前号奥付の　定価百円　は　一八〇円の誤りです。謹んで訂正いたします。

一九五九年六月二五日印刷
一九五九年七月一日発行
史林（第四二巻　第四号）　定価一八〇円
京都市左京区吉田本町
京都大学文学部内
発行所　史学研究会
振替京都五一五五番
理事長　宮崎市定
編集主任　赤松俊秀
印刷所　京都市下京区西七条御所ノ内東町三九
中村印刷株式会社